

明治仏教史を上書きする

代表者・司会 大谷栄一
コメンテータ 赤松徹真

「仏教」を「演説」する

星野靖二

本報告は明治前期における「仏教演説」に焦点を合わせ、そこで企図された「仏教」を「演説」するということがどのような位相を持つのかについて考察を加えるものである。本報告で取り上げる仏教演説は、時期的には明治十年代中葉から明治二十年代初頭までを一つの山とするものであり、また理念的には知識人教化を自覚的に問題とし、かつ演説という媒体を新しく用いるものとして考えることができる。

この仏教演説がどのように各地で実践されていたのかについては既に大濱徹也や坂口満宏らによる研究があり、反キリスト教運動と強く結びついていたことが指摘されている。これは仏教演説について考える場合の前提であるが、しかしキリスト教との接触が仏教の捉え直しを促した面もあった。この意味で、実践された仏教演説だけでなく、その理念や仏教演説の筆記などまでをも含めた広い視座において仏教演説を捉えるならば、反キリスト教運動にのみ回収されない重層性が見えてくることになる。

例えば、諸宗派協同の仏教結社の先駆とされる和敬会に即して仏教演説に込められた意図を見てみるならば、同会の発起人代表であった大内青巒や、九州和敬支会幹事で演説の名手として知られた加藤恵証は、知識人に対する教化という課題において「演説」という新しい媒体——「あたらしいコミュニケーション」(前田愛)——を採用する旨明確に述べている。この背景には、まず必ずしも仏教に積極的な関心を持つわけではない知識人に対して、仏教がどのようなものであるのかということ、を彼らが理解できるような形で説かなければ、結果として彼らが仏教は不要であるという見解、あるいはキリスト教の方が優れた宗教であるという見解に捕らわれてしまうという危機感があつた。そしてこの知識人教化を遂行する媒体として、それまで行われてきた「講義」や「説教」では充分ではないという意識があつたのである。

他方において、そのように企図された仏教演説は、演説である以上演説としての決まり事に即した形で表現されなければならなかった。例えばこの時期に見られた仏教演説の指南書において、加藤恵証(『仏教演説指南』)や伊東洋二郎(『仏教演説達弁之術』)らは漢字の読み方や声質について、あるいは適切な身なりや身振りについて説明しており、説教との差異化を念頭に置きながら身体的側面にまで踏み込んだ例示が行われている。

また演説された「仏教」について見るならば、それはしばしば通仏教的な仏教として提示された(加藤恵証『仏教演説筆記』)。これは一つにはキリスト教なるものへの対抗においてひ

パネル

とまとまりの仏教が要請されるという面があり、また一つには既に見た聞き手としての知識人の問題がある。すなわち聞き手が仏教についての知識を保持していることを前提できない以上、世俗的な知の範疇において、すなわち世俗の言葉において総体としての仏教を説く必要があると考えられていたのである。

最後に、こうした仏教演説の演説筆記について考えるならば、『仏教演説集誌』や『明教新誌』といった雑誌や新聞、あるいは多くの仏教演説本によって流通していくのであり、また逆に新聞や雑誌上に掲載された宗教論が仏教演説本に転載されることもあった（『仏教演説雄弁集』）。このように見るならば、仏教演説が盛んに行われたのは確かにある一時期のことであつたけれども、そこで試みられた仏教を世俗の言葉において論じるという営み自体は、少なくとも知識人の間においてある種一般化していくのではないか。この問題を明治中期以降における知識人による仏教論、あるいは宗教論との関わりにおいて考えることを次の課題としたい。

演説・講演というメディアと近代仏教

——啓蒙から修養へ——

岡田 正彦

明治維新によって、仏教各派は従来の伝統の多くを刷新し、組織的にも制度的にも再出発することになり、近世社会のなか

で人々の生活に浸透していた仏教は、新たな社会や文化の枠組みのもとで自らを再構築することになる。人々を教化する手段として、広く定着していた「節談説教」に代わって、「仏教演説」という新たな手法が採択されたこともその一つであろう。

明治一〇年代に、自由民権運動の隆盛とともに広がった「演説」文化を背景として、「仏教」を語る新たなメディアとして登場した「仏教演説」は、当初はキリスト教や排仏思想に対抗し、仏教の立場を理論的に擁護することを主な目的としていたが、次第に人々の教化と布教の手段に転換していく。この過程において、人々の教化の手段としては、変わらぬ影響力を持ち続けていた「節談説教」の伝統は次第に衰退し、演説という新しいメディアが、仏教思想の理論面ばかりでなく、信仰についても語る役割を担うようになる。この時期に、西洋式の修辞法や弁論術を本格的に導入しながら、独自の宗教論を展開したのが、加藤咄堂（一八七〇—一九四九）であつた。咄堂は、『明教新誌』や『中外日報』といった仏教系新聞の主筆を歴任し、最盛期には年間二〇〇回を超える講演を行い、難解な思想や古典を平易に説く演説の名手として、人気を博した。

咄堂は、その膨大な著作や講演録のなかで、度々修辞法や弁論術について論じているが、最もまとまったかたちで残されているのは、明治四十一年に刊行された『雄弁法』である。本書によれば、演説に必要なのは、自らの思想や主張を率直に聴衆に伝えることであつて、話芸を楽しむことではない。咄堂にとって、演説の修辞法は人々により広く、深くメッセージを伝えるための技法であつて、話芸自体を楽しむ説教とは、その趣